

～旧約聖書を読んで感じること～ (69)サウルの側女 リツパ

ダビデ一行は王宮に戻りましたが、民の間では相変わらず、イスラエルの10部族とユダ族の権益を巡る対立がありました。また、ペリシテとの闘いも続き、土地も痩せ、飢饉も起こりました。ダビデは軍事、財政面の立て直しを考えたのか人口調査をしたところ、イスラエル側80万、ユダ側50万の戦士を数えました。民の数を数えることは、徴兵、徴税を意味します。飢饉、疫病などを通して、ダビデはこの人口調査は神のみ心ではないことを悟りました。

飢饉が起きた時、ダビデは祈りました。その時、食糧難の原因は「ギブオン人を殺害したサウルの責任である」との託宣を受けました。ダビデはギブオン人に「あなたたちに何をしたらよいのだろうか。どのように償えば主の嗣業を祝福してもらえるだろうか。」(サム下 21:3)と問いかけました。サウルの都の近くに住んでいたギブオン人は、サウルがギブオン人を滅ぼし尽くし、その土地から追放しようとしたことに復讐したい、賠償としてサウル家の7人を請求しました。それに応じれば食糧を供出するといふのでしよう。ダビデは要求を受け入れましたが、ヨナタンの子メフィボシエは除きました。



リツパ George Becker

アヤの娘リツパとサウルの間に生まれた二人の息子、アルモニとメフィボシエと、サウルの娘ミカル(メラブ?)とメホラ人バルジライの子アドリエルとの間に生まれた五人の息子を捕らえ、ギブオン人の手に渡した。(サム下 21:8)

このサウル家の7人はギブオン人によって山の上で処刑され、晒されました。リツパはサウル王の側女でしたが、サウル亡き後、司令官アブネルも彼女と通じたこととサウルの末息子イシュ・ボシエが非難したことがあります。夫も戦場となったギレアドで晒されました。愛する人すべてを失ったリツパの悲しみ、悔しさ、憤懣は如何ばかりでしょう。彼女は山に登りました。

アヤの娘リツパは粗布を取って岩の上に広げた。収穫の初めころから、死者たちに雨が天から降り注ぐころまで、リツパは昼は空の鳥が死者の上にとまることを、夜は野の獣が襲うことを防いだ。(サム下 21:10)

死者を悼み、丁重に埋葬することはイスラエルの伝統でした。ダビデはリツパの行いを聞き、それまで放置しておいたサウルたちを思い出しました。

サウルと3人の息子達はギルボア山頂でペリシテに破れ、首を切り落され、武具を奪われ、そのままベト・シャンの城壁にさらされていましたが、サウルの戦士たちが遺体を火葬にし、ギレアドに埋葬していたのです。ダビデは彼らの遺骨を受け取り、今回晒された者たちの遺骨と共にサウルの父キシユの墓へ収めました。それでもリツパの悲しみは癒えることはなかったでしょう。

王は民に食糧を与え、安全を守らなければなりません。民に公平であるために苦渋の決断をせざるを得ない時があります。葬りが終わり、この後、神はこの国の祈りにこたえられた。(サム 21:14)と記されています。王の周囲は権益を巡っての陰謀、裏切り、へつらいが渦巻いています。ダビデは自分を含め、人間の弱さを知り、嘆かざるを得ませんでした。ただ、神のみを信じ、頼り、神に祈ることによって、救いを得ていたのです。「主の道はすべて、慈しみとまこと。主よ、あなたの御名のために罪深い私をお赦しください」(詩 25:10-11)というのがダビデの日々の祈りだったのではないのでしょうか。